様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２７２５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００１８２

研究課題名（和文）唐宋時代敦煌石窟の仏教図像と窟内荘厳プログラム

研究課題名（英文）Buddhist Iconography and Programs in the Dunhuang Caves of the Tang and Song Dynasties

研究代表者
濱田　瑞美（HAMADA, Tamami）

横浜美術大学・美術学部・准教授

研究者番号：３０３６７１４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、敦煌地域に所在する唐宋時代の仏教石窟内に造られた塑像および壁画を対象に、個々の図像学的考察とともに、窟内全体の荘厳プログラムの解明を行ったものである。千手観音図、薬師経変、維摩経変等の図像の新解釈を提示するとともに、窟内正面仏龕の本尊像と龕内壁画、および周壁の図像の考察を通して、窟内の図像荘厳と法会や受戒といった宗教行為との関係を想定するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
敦煌石窟の窟内にあらわされた仏教美術の図像について、墨書題記や関連経軌等と照合し解明を行った本研究の成果は、仏教美術史や図像学の研究進展に繋がっただけでなく、仏教学・仏教史・歴史学など他分野にも寄与できるものである。加えて、窟内全体の図像プログラム解明の成果は、敦煌石窟に限らず、仏教図像や宗教美術の研究において有効な理論を提示するものとして学術的に大きな意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study examines the statues and the murals in the Tang and Song Buddhist caves in the Dunhuang area, focusing on the iconographic programs of entire caves, as well as analysis of individual iconographic elements. In addition to presenting new interpretations of the iconography of the Thousand-Armed Avalokitesvara, the Bhaisajyaguru Sutra Scene, and the Vimalakirti Sutra Scene, the study of the main image in the frontal niche, the murals inside the niche, and the murals on the surrounding walls in the caves led to the assumption of the relationship between the iconographic in the cave and religious practices such as the puja and the receiving the Buddhist precepts.

研究分野：東洋美術史、仏教美術史

キーワード：敦煌美術　仏教美術　図像研究　図像構成　石窟空間　経変　題記

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

仏教尊像および仏教絵画における図像学的研究の基本的・伝統的な手法は、個々の作品の図像内容と経典・儀軌等の関連文献との照合によって当該図像が表現しているものが何かを明らかにするというものである。中国甘粛省の敦煌石窟の内部は、立体の塑像と壁画とで隙間なく荘厳されている。北朝期の中心柱窟では、中心柱を右回りに巡る動き（右繞）が想定され、この動きに連動する図像があらわされており、壁画の内容と配置、そしてそれを観る動きとが密接に関係していることが明らかとなっている。しかし、主として方形プランの単純な構造をとる唐代以降の敦煌石窟では、窟内での動きを想定し難く、加えて壁画の種類が増し、図像内容も複雑なものに変化するため、個別の作例あるいは主題別の図像学的研究に留まる傾向が強かった。

しかし、壁画の種類が多くなればなるほど、それらを窟内のどの場所に配置するかということは重要になるはずである。尊像・壁画は窟内に意味をもって有機的に配置されているに違いない。仏教空間である石窟内部では仏教儀式も行われた。石窟は造って終わりではなく、造窟した後もそこは宗教的な空間として人びとに使用されたと考えられる。そのことを踏まえ、塑像や壁画が観者にとってどのような意味をもち、窟内に有機的に配置されているのかという窟内全体の荘厳プログラムの解明が必要である。

２．研究の目的

本研究の目的は、中国甘粛省敦煌地域の唐宋時代の仏教石窟内に造られた塑像および壁画の図像と、窟内全体の荘厳プログラムとの密接な関係性の解明にある。石窟内部の塑像や壁画が何らかの意図をもって有機的に配置されていることを前提に、個々の作例の図像研究を行い、その成果を基に窟内の荘厳プログラムを考察する。逆に、窟内荘厳プログラムの解明の成果を手掛かりとし、個々の図像に込められた意味を明らかにする。本研究は、仏教石窟の図像研究における新しい方法論の提示を目指すものである。

３．研究の方法

以下の(1)から(4)の方法により、仏教石窟の窟内荘厳プログラムの解明を行った。

(1)敦煌地域の唐宋時代の仏教石窟にあらわされた塑像や壁画の図像、および題記のデータを取得する。

(2)各図像や題記のデータと経典等の文献記載とを照合する。

(3)窟内での図像の配置と組み合わせについて考察する。

(4)窟内における仏教儀式等の実践行為と図像との有機的な関係を明らかにする。

４．研究成果

(1)唐代以降の千手観音の図像と頂上化仏手について

唐代以降の敦煌莫高窟・瓜州榆林窟の壁画および敦煌将来絵画にみられる千手観音の大手の二本を頭上に挙げて化仏を執る図像について研究を行った。同図像は従来経典に依拠しない特殊な図像とみられてきたが、本研究ではこれが千手観音の関連文献に説かれる「頂上化仏手」であること、およびそれが大悲心陀羅尼の念誦により摩頂授記と浄土往生を象徴する図像であることを確認した。さらに敦煌の盛唐・中唐期の千手観音の同図像においては観音の標幟である宝冠の化仏が描かれないという現象を発見し、この現象が頂上化仏と宝冠の化仏が同化したものであると指摘した。同化現象の要因として、両者に衆生を浄土往生に導く仏としての効能の重なりが挙げられる。頂上化仏手の図像については、唐宋期の四川地域摩崖造像の作例との比較研究も行った。

(2)千手観音および如意輪観音と不空羂索観音の関係について

敦煌将来絵画の千手観音図の中に如意輪観音と不空羂索観音が眷属として描かれる図像に関し、『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』に依拠する大悲心陀羅尼の念誦との密接な関係性を明らかにした。加えて、敦煌石窟の前室正面上方の中央に千手観音、左右に如意輪観音と不空羂索観音の三図を配することについても、主室に入る手前で大悲心陀羅尼の念誦が行われていたこと、およびその行為が千手観音図のみならず他の二図にも関連するものであった可能性について指摘し、窟内の荘厳プログラムと宗教的な実践行為との関係性の一端を明らかにできた。

(3)隋唐時代の薬師経変の図像について

敦煌石窟隋代の薬師経変にみられる十二神将の跪坐燃灯の図像が『灌頂抜除過罪生死得度経』に拠って表現された可能性とともに、初唐期の薬師経変において続命法に関する図像が盛り込まれていること、ならびに盛唐期の薬師経変の題記に『薬師経』の複数の訳本が採用されていることを指摘した。そのうち盛唐期の作例に義浄訳『薬師瑠璃光七仏本願功徳経』に基づく陀羅尼句が題記と図像とであらわされることについては、図の前で陀羅尼念誦が行われた状況が想定され、窟内の壁画と実践行為とが関連していることの一例を示すことができた。

(4)唐代の維摩経変の図像と題記について
　敦煌石窟唐代の維摩経変の題記を翻刻し、依拠経文の比定を行い、中唐・晩唐期の題記が鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』に基づくことが明らかになった。同時期の短冊形の題記の多くに、経文の中の登場人物のセリフが採用されていることから、題記はあたかも現代の漫画の吹き出しのような役割を担っていた可能性を指摘した。往時、人びとが題記を読みあげながら、あるいはそれを聴きながら壁画を観ていた状況が想定される。仏教石窟における音声を伴った演出の想定は、他図像の解釈や窟内荘厳プログラムの研究において新たな視点となり得る。

(5)仏龕内の維摩経変の図像と玄奘訳『説無垢称経』について
　敦煌莫高窟初唐期の窟内正面の仏龕内壁に描かれた維摩経変について、維摩像に付された尊名題記が玄奘による維摩経の新訳『説無垢称経』に依拠するとともに、これら龕内の維摩経変に特有の図像が同経「菩薩行品」に基づくものであることを明らかにした。仏龕内には本尊として釈迦仏塑像がつくられており、龕内壁龕内の維摩経変はその釈迦仏世界について視覚的に補足説明するという役割がある。莫高窟の初唐期に限って確認される龕内の釈迦仏世界に維摩経変を伴う表現は、玄奘とその周辺による唯識の仏土思想を反映したものである可能性が高い。

(6)維摩経変における釈迦仏世界の図像と配置について
　敦煌莫高窟の維摩経変に描き込まれる釈迦仏の図像表現とその図中の位置が、同経変図の窟内配置と関係があることを明らかした。唐後期には、維摩経変図中の釈迦仏世界は他の複数の仏世界と同様に下方に雲を伴い、それらと並置されて描かれる一方、初唐期の維摩経変の釈迦仏世界は雲を伴わず、かつ画面の西端に配置されており、維摩・文殊の弁論する地との連続性および距離的な隔たりが示される。この初唐期の表現は当時の中国の仏教界におけるインドの位置付けと地理観を窟内壁画に反映していた可能性とともに、釈迦仏世界の図中の位置は窟内西龕本尊の釈迦像と関係があるものと考えらえる。

(7)窟内正面龕内の本尊塑像と仏龕図像について
　敦煌莫高窟唐五代の伏斗形方窟の正面龕内に置かれた本尊如来塑像の尊格および龕内壁画の図像について、それぞれの時代的な特徴とともに、両者における密接な図像的関係を明らかにしたものである。窟本尊の尊格は釈迦が過半数を占めるが、盛唐から晩唐期には弥勒が一定数造られているほか、阿弥陀の作例もあること、さらには唐後期の龕内壁画に薬師経変の一部が描かれることから、既に失われた本尊が薬師であった可能性について言及した。また、中唐期の龕内に戒律図を描く作例についても、五代以降の梵網経変の一部に同様の図像がみられることから、同経変の中尊である盧舎那が龕内本尊であった可能性もあるとともに、受戒の誓願との関係性が推測される。
　さらに、五代窟の正面龕内の菩薩像に付された尊名題記が『金光明最勝王経』に基づくことを見出すとともに、同時期の窟内の入口側に大きく描かれる供養者列像との関係から、窟内全体が同経に基づく法会空間として機能していた可能性を指摘し、窟内全体の荘厳プログラムを考察する上で、仏教儀式等の実践行為との関連という視点の有効性を示した。

　以上、敦煌石窟の図像内容と題記による依拠経典の解明、図像の配置とその意味、ならびに窟内における陀羅尼念誦や受戒等の実践行為や法会等の仏教儀式と図像との関係から、窟内荘厳プログラムの実相の一端を明らかすることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 濱田瑞美	４．巻 3
２．論文標題 敦煌莫高窟佛教圖像與題記――以唐代經變圖為例	５．発行年 2023年
３．雑誌名 第三届佛教藝術学術研討論文集	６．最初と最後の頁 105-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tamami Hamada	４．巻 7
２．論文標題 Images of Thousand-armed Avalokitesvara with Cintamanicakra and Amoghapasa as attendants: References to the chanting of the “Dabeixin dharani 大悲心陀羅尼”	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Studies in Chinese Religions	６．最初と最後の頁 159-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/23729988.2021.1941617	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 濱田瑞美	４．巻 5
２．論文標題 四川地区唐宋時期千手千眼観音造像中所見“頂上化佛手”的表現与意義	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大足学刊	６．最初と最後の頁 104-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tamami Hamada	４．巻 4-1
２．論文標題 Shakyamuni Buddha World Depicted in Vimalakirti Scenes in Dunhuang Mogao Caves: The Expansion of Buddha Land to China	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Hualin International Journal of Buddhist Studies	６．最初と最後の頁 37-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15239/hijbs.04.01.02	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 濱田瑞美	4．巻 5
2．論文標題 敦煌石窟壁画的窟内配置与図像研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 絲綢之路研究集刊	6．最初と最後の頁 140-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 濱田瑞美	4．巻 11
2．論文標題 敦煌石窟唐代維摩経変の題記について	5．発行年 2021年
3．雑誌名 横浜美術大学教育・研究紀要	6．最初と最後の頁 45-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 濱田瑞美	4．巻 10
2．論文標題 敦煌の千手観音にみる頂上化仏手の図像について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 横浜美術大学教育・研究紀要	6．最初と最後の頁 33-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Tamami Hamada
2．発表標題 Shakyamuni Buddha World Depicted in Vimalakirti Scenes in Dunhuang Mogao Caves: The Expansion of Buddha-land to China
3．学会等名 East Asian Buddhist Worldmaking（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 濱田瑞美
２．発表標題 敦煌莫高窟佛教圖像與題記――以唐代經變圖為例
３．学会等名 2021華梵大學佛教藝術國際學術研討會（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 濱田瑞美
２．発表標題 四川地区唐宋時期千手観音像的図像学ー“頂上化佛手”的表現与意義
３．学会等名 2019年 大足学国際学術研討会　暨大足石刻列入《世界遺産名録》二十周年紀念会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tamami Hamada
２．発表標題 Images of Thousand-armed Avalokitesvara with Cintamani-cakra and Amoghapasa as attendants: References to the chanting of the “Dabeixin dharani 大悲心陀羅尼”
３．学会等名 Esoteric Buddhism and East Asian Society（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

１．著者名 馮培紅（編）、濱田瑞美ほか	４．発行年 2023年
２．出版社 甘粛文化出版社	５．総ページ数 -
３．書名 面壁窮経一甲子――施萍ﾃｨ先生敦煌研究六十年紀念文集	

１．著者名 吉田豊、荒川正晴、宮治昭、エリカ・フォルテ、橘堂晃一、影山悦子、濱田瑞美、荒見泰史、佐野誠子、小野嶋祥雄	４．発行年 2023年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 -
３．書名 玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本	

１．著者名 木俣元一・近本謙介（編）、濱田瑞美ほか	４．発行年 2022年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 728
３．書名 宗教遺産テキスト学の創成	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関